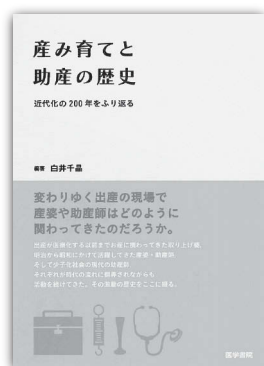


この本、いかがですか？

深く広く生と死の傍らにいた 先輩助産師の息遣いが聞こえる



産み育てと助産の歴史 近代化の200年をふり返る

白井千晶 編著
本体 2800 円＋税
A5判／医学書院／2016 年

評者

三宅はつえ ものみ助産院

テレビドラマの出産シーン監修を請け負うようになって14年になり、かかわった作品も30を超えた。「平安時代のお産なんですが、何があったらそれらしいですかね」とか「昭和30年代と10年前と現在と、それぞれの時代のお産を象徴するようなセリフがほしいんですが、どんな言葉がいいですか」などという要求に応えるため、お産の歴史に関する本を何冊も読み込んできた。それらの本と比べても、本書に対しては「圧巻」という文字が浮かんでくる。なにしろ「近代化の200年」である。取り上げ産婆から産婆、助産婦、助産師と、名称も職域もダイナミックに変化した激動の時代を、14名の多彩な執筆者が解説している。その面々とは歴史学研究者、社会学研究者、助産学研究者、

ジャーナリストなど、学問的な背景も一様ではない。さまざまな角度から見つめられたにっぽんのお産が、そこにある。

若い世代には、日本とアメリカが戦争をしていた事実ピンとこない人がいるという。日本史が選択科目で履修しなかったり、時間切れで近現代史はかけ足だったりすることが要因ではないだろうか。

ひるがえ
翻って助産師教育のなかでは、助産師の歴史はどのように扱われているのか。限られた時間のなかでは教える側の思いとは裏腹に、受け取る学生に興味があれば記憶には残りにくいかもしれない。終戦当時、助産師制度がなかったアメリカは日本の医療の民主化の一環として「保健師法案」を討議した。結果的には廃案になったが、この法案が通っていたら現在の日本に「助産師」という職名はなかったことになる。

さらに遡ること数十年、「産師法」^{さかのぼ}について運動は初耳という方もいるだろう。大正末期に大阪から始まったこの運動は昭和17(1942)年まで続き、大日本産婆会が組織されるきっかけにもなったそうだ。昔から大阪には熱い先輩が多くいらして、やっぱり始まりは大阪かと妙に納得してしまった。全国先輩方が産師法の成立を目指して議会に働きかけたが、貴族院を通らなかったという。歴史に「もしも」はないとわかっていても、この時「産師法」が可決していたら、現代の助産師はどんな仕事をしていただろう。

本書の歴史解説の合間にはいくつかのコラムがあり、昭和初期の銀幕スターの墮胎に産婆がかかわった話や、産婆会が組織的に養子縁組を行っていた話などが紹介されている。今よりも深く幅広く生と死の傍らにいた先輩たちの息遣いが聞こえてきそうな本書を、助産師必携の1冊とお勧めしたい。

J